

「不滅の江戸川乱歩展」報告

光文化財団 北村 一男

「戦後池袋——ヤミ市から自由文化都市へ」プロジェクトの一環として、ミステリー文学資料館では、資料館運営委員のミステリー評論家・新保博久氏プロデュースによる「没後五十年——不滅の江戸川乱歩展」を九月一日（火）～十月三日（土）開催した。

一カ月あまりでの来館者総数五九六名（うちプロジェクト期間中四四八名）。

これは三カ月半で五〇〇名を突破した「中井英夫展」（二〇一四年十一月七日～二〇一五年二月二十八日）を上回る、当館としては画期的な盛況だった。プロジェクト期間中は共通パンフレット提示により入館無料（通常三〇〇円）としたこともあるが、やはり大乱歩の底力を実感した。

大衆文化研究センターからは「D坂の殺人事件」草稿を

はじめ貴重な生原稿を拝借し、同年二月、Edhikaギャラリーにてさきがけ展示された「江戸川乱歩展」乱歩が池袋に残したものの「ポスターを、としま未来文化財団のご厚意により再展示させていただいた。

いくつか展示の「目玉」を紹介しておきたい。

〈乱歩からの手紙〉（高木晶子氏所蔵）

敗戦により中島飛行機を失職した高木彬光は観相師の勧めによって小説家を志し、『刺青殺人事件』原稿を江戸川乱歩に送った。待ちかねた朗報は大晦日にもたらされた。（一九四七年十二月二十九日付）

拝啓大変おくれましたが御作漸く拝読の機を得ました。

謎と論理の点では非常に感心しました。(但し小説としては上乘に非ず) 発表に努力いたしたいと存じます。それにつき一度お話ししておきたく、正月四日又は六日午後二時頃御来駕下さいませんか。もし、右両日御差支あらばその旨御ハガキ下されたく改めて日取りを定めます。両日のいづれかに御出で下さるならば「何日行く」と御電報下さい、でないとお駄足をさせるやうなことになってはいけませんから。拝眉万々(池袋駅から自宅までの地図が添えられている)

〈遷厝乱歩肖像画〉(松野家より寄贈)

「別冊宝石四二号 江戸川乱歩遷厝記念号」(昭和二十九年十一月十日発行) 表紙に使用された松野一夫描く肖像画一五号キャンバス(六五〇×五三〇mm) 油絵。

この夏、日本推理作家協会事務所倉庫にて、同協会常任理事・山前讓氏によって発見された。山前氏は当財団理事でもあり、「乱歩展」新発見資料として提示された。推協事務所に、いつからなぜ保管されていたかは不明だが、「宝石社」が松野家に返却しないまま昭和三十九年に倒産、債権者に持ち去られることを危惧した当時の関係者が一時的に推協に避難させ、引き継がれることなく忘れられ、今日に

至った可能性もある。

松野一夫は一九二一(大正十)年から二十八年間「新青年」の表紙画を担当、同誌に連載された小栗虫太郎『黒死館殺人事件』はじめ、挿絵画家として活躍した。

今回の展示をきっかけに、松野家より財団資料館にご寄贈いただいた。なお、同構図の肖像画が旧江戸川乱歩邸応接間に掲額されており、こちらは宝石社から乱歩に贈られたものとはつきりしている。

〈乱歩葬儀役割一覽〉(平井憲太郎氏提供、新発見感熱紙コピー)

乱歩は一九六五(昭和四十)年七月二十八日に亡くなり、二十九日通夜、三十日密葬ののち、八月一日に本葬が日本推理作家協会葬としていとなまれた。以下が葬儀の際の役割分担である。大御所から新鋭まで協会こぞって巨星を送った。山村正夫『続々・推理文壇戦後史』によれば――

「葬儀委員長には、乱歩先生の生前、一番縁の深かった大下宇陀児先生が選ばれた。協会葬となれば、本来は理事長の松本清張氏が委員長になるのが筋だったが、理事会の話し合いでそう決まったのである」(青山葬儀所での本葬で

は)「松本清張理事長が左記のような弔辞を朗読した」「つづいて友人代表横溝正史氏、文芸家協会代表富田常雄氏等の切々たる弔辞が読み上げられ、会葬者一、二〇〇名の焼香の列がつづいた」

江戸川乱歩葬儀役割分担一覧

葬儀委員長 〓 太下宇陀児

委員 〓 横溝正史 / 角田喜久雄 / 水谷準 / 本位田準一 / 島田一男 / 中島河太郎 / 山村正夫

〈場外〉

受付 〓 佐野洋 / 高木彬光 / 山田風太郎 / 椿八郎 / 都筑道夫 / 結城昌治 / 岩谷志げ子 / 椿野喜代子

整理係 〓 大坪直行 / 阿部主計 / 講談社三名

配車係 〓 加納一朗 / 講談社二名

マイク 〓 山本

会計 〓 佐賀潜 / 岩田豊樹 / 松村喜雄

クローク 〓 博友社 (高村、飯島)

会葬御礼 〓 多岐川恭 / 樹下太郎 / 陳舜臣

〈場内〉

進行係 〓 日影丈吉 / 大河内常平

整理係 〓 桃源社二名

遺族係 〓 鷺尾三郎 / 田中潤司
来賓係 〓 笹沢左保 / 新章文字 / 戸川昌子

(光文文化財団 ミステリー文学資料館)



